

パンタナル通信

南北米福地開発協会 会報 2006年9月1日発行 第36号



飯野事務総長レタ滞在報告

水位が上がるまでは、草地だったところがついに水が侵入し、沢山の湿地帯が生まれ、基地の中にも、今まで奥地の支流の岸辺で、しばしば見てきた鳥達が、何種類も飛び交い、餌をついばんでいます。

バード・ウォッチングには、最高の季節に思われます。

第一船着場近辺、倉庫前、海軍警備小屋から修練所にかけての湿地帯など、ほとんどの鳥がしばし、住み着いている感があります。



雀より大きい黒鳥も何百羽という群れをなしています。シギのような水鳥も三〇羽程に増えていますし、小型の鷺のようなカラカラも開拓当初三、四羽だったのが、今では三〇羽ちかく見かけます。

昨日、水草を十mほどの網をつかって採る作業を、中田先生と労働者四人が取り組んで、車に何回分かを回収しました。小魚も色々水草と共に入ってきます。

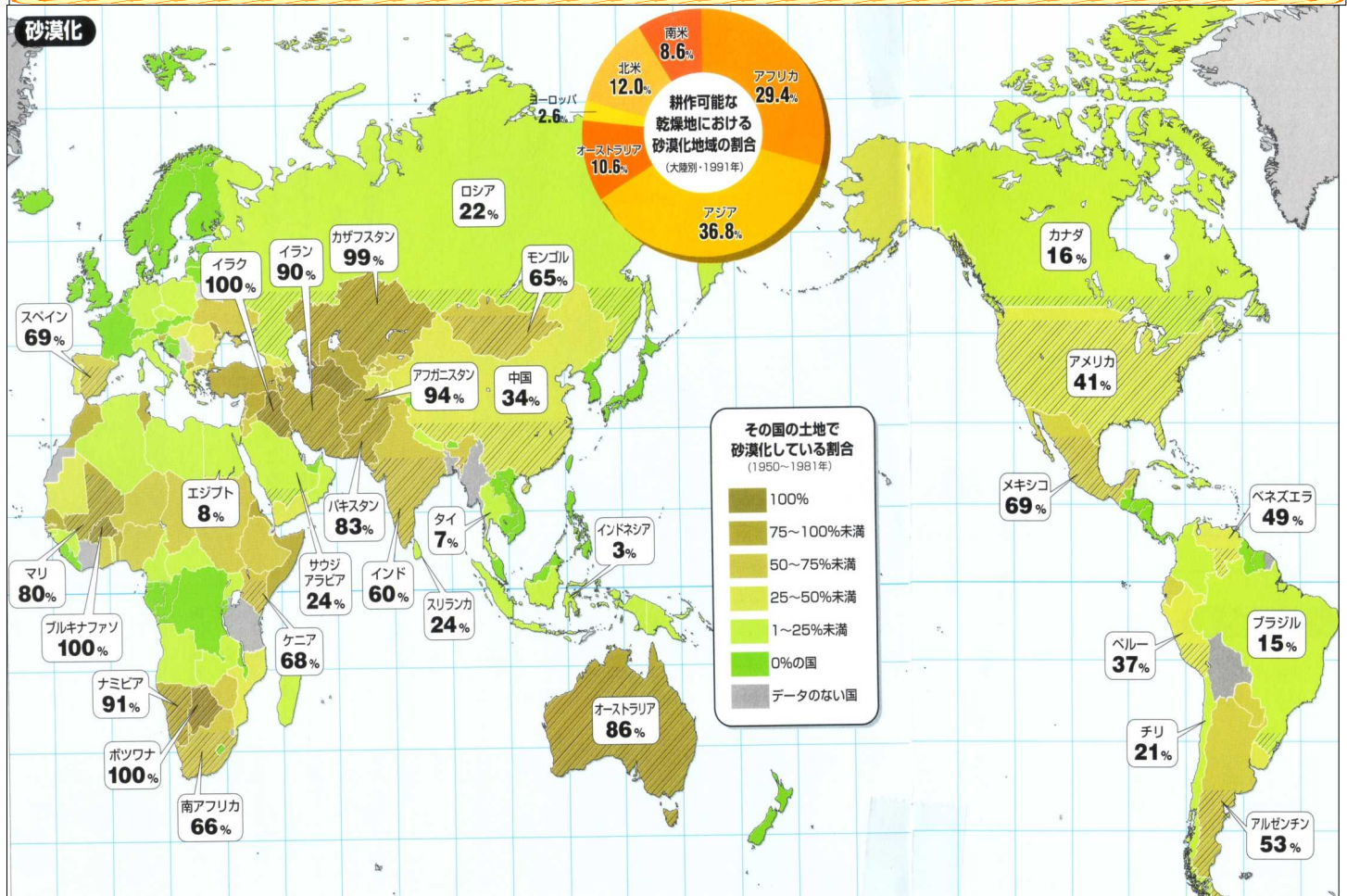
今日は大山先生が、引き継いで採集しています。畑の肥料として抜群の効果があるのではないかと期待しています。

お陰で、稲藁、牛糞、馬糞、鶏糞、ヤシの木から作った炭などを混ぜて、堆肥造りも積極的になされ、三つの堆肥コーナーが、一杯になってきています。

化学肥料を使わずに、畑の土壌改良にもなると予想しています。

二日間、強い北風が吹いて、道路はかなり砂塵が舞いましたが、今日は穏やか日和となりました。美しいパンタナルの草原が支流の岸辺に広がり、空を鮮やかな茜色に染めながら、赤く大きく沈み行く夕陽の様は、毎日見ても飽きることはありません。

人口増加が生む砂の海



人口増加が生む砂の海

(進む砂漠化)

国連の組織で環境問題について国際協力を進める国連環境計画（UNEP）は、砂漠化の影響を受けている土地の面積は、世界の耕作可能な乾燥地域の七〇%にもなると指摘しています。これより、世界人口のおよそ七分の一にあたる九億人が食料不足などの影響を受けているといわれています。地域ごとに砂漠化の様子を見ると、アフリカとアジアが深刻で、全世界で砂漠化が進んでいる面積の三分の二が、この二つの大陸に集中しています。

砂漠化とは、もともと水の少ない乾燥した土地が人間の活動によってますます乾燥し、植物が育たない不毛な土地になってしまふことです。一度砂漠になってしまった土地は、膨大な労力と費用をかけない限り元に戻りません。

発展途上国ではコーヒーなどお金を稼ぎやすい作物を栽培する農地を拡大するために森林を伐採しています。また、炊事や暖房のための燃料としても樹木を伐採します。

さらには乾燥地域の人々は食料の確保を家畜に頼っており、人口増加に合わせて家畜の数を増やします。家畜は草を食べつくしてしまい砂漠化を加速させます。砂漠化を防止するために、現在では人工的に湖を造り、吸水性の高い保水剤を地下に埋め込んで水を蓄えて植物を育てるなどの事業を進めています。これまで乾燥地域で使われてきた伝統的な技術も見直されています。

ケニアの環境副大臣ワンガリー・マタイさんは、アフリカで約三〇〇万本の植林を行なってきたことが評価され、二〇〇四年にノーベル平和賞しました。マタイさんは「木を植えたことで、私達は平和と希望の種を植えてきた。」と話しています。

《環境》自分で森をつくり環境を保全する時代

特別寄稿

地球の緑を守る会（NPO法人）

事務局長 高津啓洋

今最も重要なことは

豊かな生物多様性を維持する土地本来の森をつくること！

環境問題に対して市民として何ができるか？ こう考えている人は多いのではないだろうか。意外に思うかもしれないが、答えは「一人ひとりが自分が住み生活している現場の環境を保全すること」である。

最新の植物生態学は「本来の森の豊かな多様性が人のいのち・心・遺伝子を守る」という結論を出している。本来の森というのはその土地本来の樹種で構成された森のこと。関東地方でいえば内陸部はシラカシ、尾根筋はシイノキ、海岸沿いはタブノキが土地本来の木である。

このシイ・タブ・カシが関東以西の本来の森の主木である。やりやすすくいえば「ほんものの木」（植物生態学者、宮脇昭先生の造語）といえる。サクラやハナミズキはどんなに美しくても「にせものの木」である。残念ながら今の日本列島はほとんどがにせものの木で覆われている。ほんものとは、厳しい環境に耐えて長持ちする木のこと。

つまり地震、火事、風水害から人間を守ってくれる森である

近年、自然災害が多くなったのも深根性・直根性の常緑広葉樹を伐採して、根の浅いスギ、ヒノキ、カラマツ、マツを植え過ぎたからだ。頻発する土砂崩れなどはそれが主な原因になっている。

ただ植林をして緑を増やせばいいわけではない。土地本来の樹種をとり違えないことが重要。

結論的に言えば、自分でドングリを拾い、自宅のプランターなどに播種し、2年ものポット苗を育て、生活の周辺に植える場所を見つけ、1本でも多くほんものの木を植えることである。

『自分のいのちは自分で守る』決意で手の上に触れ木を植える行為をすれば、生物の本性が目覚め環境を守ることに敏感になるはずである。また自ら植樹を実践することで生物の一種としての本能的喜びを感じることができるよう。環境保護の世界では、「シンク・グロバリー、アクト・ローカリー」（考えるときは地球規模で、行動は足元から）という言葉がある。

植樹活動に関心がある方、また、植樹活動に参加を希望する方は左記の緑の会事務局に連絡してください。

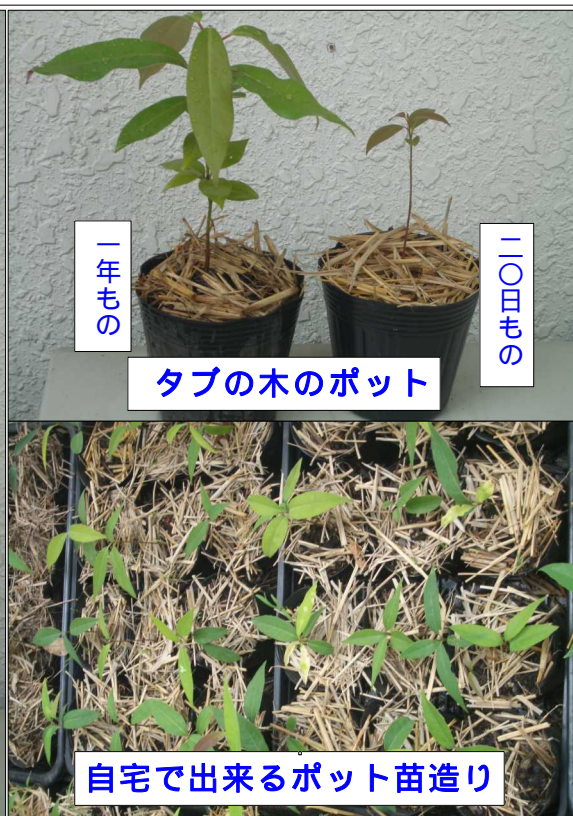
〒一九三〇八四四 東京都八王子市高尾町一五六四―一

メゾン 九〇四 三〇一

電話 〇四二六―二九 一四四三



クヌギのポット苗



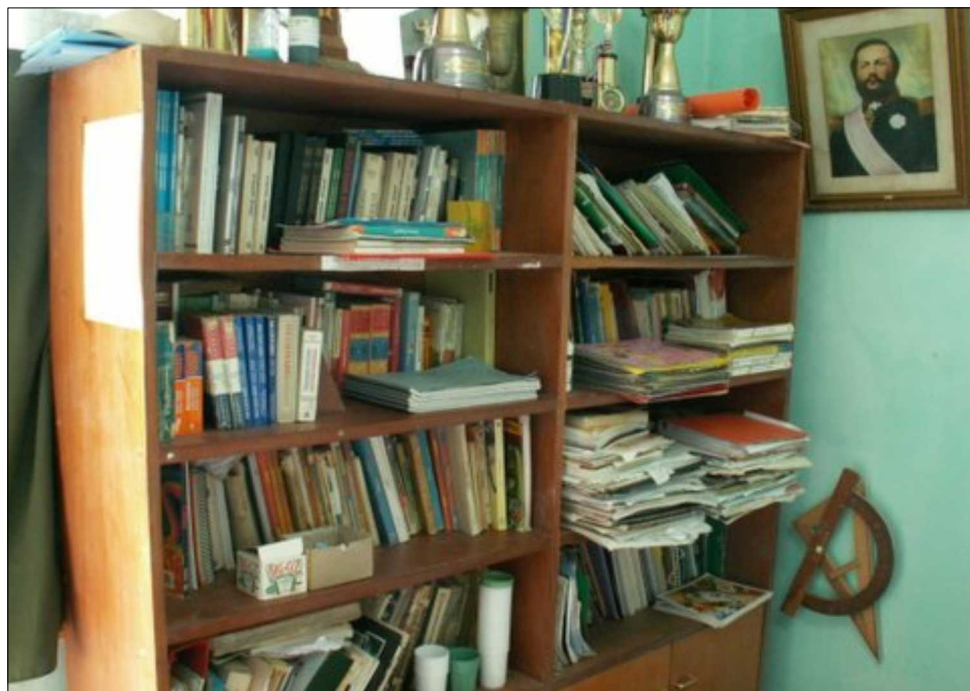
タブの木のポット

一年もの

二〇日もの

自宅で出来るポット苗造り

会員の皆様の支援を有効に用いる為に、村の学校を
飯野事務総長、佐野南北米福地財団副会長が準備訪問。



バイアネグラ中学校、高校の全蔵書と校長先生ならびにトロパンパの学校の先生方。

挨拶の後、訪問の趣旨を説明し、学校の状況を確認し、今回の四箇所の内、一番生徒数が多い中学校・高等学校（生徒数一〇五名）及び小学校（生徒数一八九名）が一緒になっているバイアネグラ公立学校を案内してもらい訪問、今回の図書寄贈の主旨をそれぞれの校長に説明し、コピー機の要望があつたが、今回は図書に限定されていることをはっきり話して、理解してもらつた。蔵書棚を見せてもらつたが、ほとんどまともな本はなかつた。図書として必要な本のリストを、中学・高校と小学校の校長に提出を依頼しました。結局ここでは、それぞれ学年に応じた二セツトの本箱及び図書を送ることにした。バイアネグラから九十五km南に走って、サン カルロス到着。今日はパラグアイでは、「子供の日」として学校はお休みになっていたが、女性のまだ若い校長が、教室を案内してくれた。わずか三十二名の小学生と九名の中学生を教えているそうだが、とにかく教科書もまともでないだけに、突然の我々の訪問に、大変よろこんでくれた。

来年からは再び国際協力青年ボランティアを募集します。
ご期待ください。



二〇〇六年度 環境セミナー
第三回 九月一七日

午前一〇時～午後五時まで

場所：南北米福地開発協会事務局

費用 三千元（昼食付き）

内容 地球温暖化と植樹の重要性、

レタ開発について

第四回 一二月一七日

詳細は後ほど連絡します。

南北米福地開発協会 事務局

〒二二一三〇〇〇一

神奈川県川崎市高津区

溝口三十一番一十五

岩崎ビル四F

電話 〇四四一八二九一二八二

Fax 八二九一二八二〇

会費納入 郵便口座

一〇一八〇一七七六八〇四七一

代表 柴沼邦彦